

取材のお願い

**第 61 回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展日本館（2026）
荒川ナツシュ医「草の赤ちゃん、月の赤ちゃん」ロゴ、展示詳細が決定**

国際交流基金（JF）は第 61 回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展の日本館展示、荒川ナツシュ医による「草の赤ちゃん、月の赤ちゃん」の展覧会ロゴおよび、詳細を発表いたします。



展覧会ロゴ（デザイン：森大志郎、小池俊起）

「草の赤ちゃん、月の赤ちゃん」は、2024年に双子の親となったクィアアーティストの荒川ナツシュ医の子育ての体験から生まれた作品です。アメリカでアジア人ディアスポラとして生活する作家自身のアイデンティティや母国の歴史への省察、個人的な育児体験を起点に、来館者が未来の象徴である赤ちゃんを育成する「ケア」の営みを体験しながら、彼らが将来生きるであろう世界のありかたを問いかける空間へと日本館を変容させます。本展には荒川ナツシュ医のほか、分野や国境、さらには時代や世代を超えた様々な表現者がコラボレーターとして参加します。

また、本ロゴを用いたTシャツなどを返礼品とするクラウドファンディングを実施中です。ヴェネチアでの実践を映像作品として記録し、未来へ繋ぐ資金となります。より多くの方々とこのプロセスを共有するため、募集期間を2026年4月12日（日）まで延長することを決定いたしました。

この件に関するお問い合わせ：

国際交流基金 ブランド推進部 広報課（担当：福島、熊倉）

Tel: 03-5369-6075 / Fax: 03-5369-6044 E-mail: press@jpf.go.jp

取材のお願い

荒川ナッシュ医は、ニューヨークでアーティストとしてのキャリアを築き、現在はロサンゼルスを拠点に、パフォーマンス・アーティストとして活動を行ってきました。その作品は、独占的な作者としての特権性を手放し、他者の参加や偶然性を歓迎するオープンな表現として高く評価されており、テート・モダン（ロンドン）やMoMA（ニューヨーク）といった世界有数の美術館で発表されています。

2024年には東京の国立新美術館で大規模な個展が開催され、美術史上のアイコン的な作品からポップミュージック、個人の育児体験までを等しく編み込む空間を創出しました。専門家とアマチュア、私的（プライベート）と公的（パブリック）といった境界を軽やかに取り払うその実践は、大きな注目を集めました。

「草の赤ちゃん、月の赤ちゃん」は、日本館の歴史と現代美術における国際的な潮流を踏まえ、以下の4点において重要な意義があります。

日本の多様性を体現する作家：福島県に生まれ、現在は米国籍を持つ日系アメリカ人である荒川ナッシュは、日本国籍を有しない作家として初めて日本館で個展を開催します。多文化的な背景を持つ作家が選出される近年の国際的な動向とも呼応しており、現在の「日本の多様性」をヴェネチアという国際舞台で提示する機会となります。

国内外で活動する様々なスペシャリストとのコラボレーション：本展は、香港のCHAT（Centre for Heritage, Arts and Textile）館長兼チーフ・キュレーターを務める高橋瑞木と、シンガポール国立美術館のシニア・キュレーター兼キュレトリアル&コレクション部門部長である堀川理沙の二人が共同してキュレーターを務めます。さらに、美術の枠組みを超えた国内外の様々なジャンルのスペシャリストが参加し、荒川ナッシュ医とともに本展を構成します。多様な専門性が交差するダイナミックなコラボレーションは、日本館の展示における新たな可能性を提示します。

日本館設立70周年、吉阪隆正の設計意図の再解釈：1956年の竣工から70周年を迎える本年、荒川ナッシュは建築家・吉阪隆正が提唱した、多様な個性が関連し合いながら全体を構成するという理論、「不連続統一体」や庭と建物の「回遊性」に着目しました。吉阪の建築思想を再解釈し、歴史的建築を省察とケアの空間へと変容させます。

史上初となる韓国館との公式連携：ジャルディーニ二地区で隣接する韓国館と、史上初となる公式な連携を予定しています。お互いの作品が行き来する仕掛けや、内覧会セレモニーやパーティーでの共同プログラムの実施など、ヴェネチア・ビエンナーレというヨーロッパの美術展において、アジアの存在感を高め、国家の枠組みを越えた共生するかたちを具体的に示します。

この件に関するお問い合わせ：

国際交流基金 ブランド推進部 広報課（担当：福島、熊倉）

Tel: 03-5369-6075 / Fax: 03-5369-6044 E-mail: press@jpf.go.jp

取材のお願い

「草の赤ちゃん、月の赤ちゃん」展示詳細

タイトル「草の赤ちゃん、月の赤ちゃん」は、吉阪隆正が設計した日本館の庭と建物の「回遊性」に着目し、庭を象徴する「草」と時間や心に関係する「月」に由来すると同時に、荒川ナッシュがニューヨークでの学生時代に刺激を受けた草月アートセンターへのオマージュでもあります。アートや音楽、詩、パフォーマンス、生け花などのジャンルを超えた実験の場であった同センターのように、日本館は多彩なコラボレーターとともにジャンルを横断し融合する場となります。

日本館の来館者は、ミラーレンズのサングラスをかけ、色とりどりのベビー服を着た、様々な肌の色の赤ちゃん人形 200 体に迎えられます。本展は、来館者が赤ちゃんをケアしながら、多彩なコラボレーターとの様々な作品を鑑賞する観客参加型の作品です。

まず、赤ちゃんとの出会いの場となる 1 階のピロティエリアでは、57 体の赤ちゃん人形が、ケアしてくれる来館者を待っています。希望する来館者は、ピロティエリアで生後 3-4 ヶ月の乳児と同程度の重さ（約 5 キロ）がある人形を預かり、抱きながら展示を巡ることで重みを通じた身体感覚を伴う体験をします。この人形たちのベビー服は、福島に暮らす荒川ナッシュ医の母親である荒川美和子と、その友人たちが縫製しており、作家自身の家族の物語が展示の一部として組み込まれています。

また、ピロティの一角に設置された多目的スペースでは、アジアのアートスペースに言及した展示や、若手キュレーターやアーティストに向けたワークショップが開催予定です。日本館の外壁では、R・キクオ・ジョンソンによる吉阪隆正と大竹十一をモチーフにしたイラストが来館者を館内へと導きます。館内へ進むと、実験的なアートで満たされた託児所のような空間が広がります。荒川ナッシュの双子の赤ちゃんの声をういてサージ・チェレプニンが作曲したサウンドが空間全体に鳴り響きます。1995 年に日本館代表として参加した崔在銀（チェ・ジェウン）の映像作品、イサム・ノグチによる作品とそれに触発された子どもたちによる作品なども展示され、時を超えた共鳴が生まれます。

展示の結びとなる出口付近では、来館者は抱いてきた赤ちゃんのオムツを替えるという、具体的なケアを行います。オムツに印刷された QR コードをスキャンすると、占星術師でライター石井ゆかりが、その赤ちゃんの誕生日に合わせて執筆した「オムツの詩」が贈られます。未来への継承として、赤ちゃん人形には荒川ナッシュが自身の子供たちに伝えたい 20 世紀の歴史的な日付が誕生日として設定されています。私たちは、過去とどのように向き合い、その先にある新しい命をどう祝福できるのか。来館者はケアという個人的な行為を通じて、世代を超えて受け継がれる責任と希望の問いに直面します。

この件に関するお問い合わせ：

国際交流基金 ブランド推進部 広報課（担当：福島、熊倉）

Tel: 03-5369-6075 / Fax: 03-5369-6044 E-mail: press@jpf.go.jp

取材のお願い

さらに、荒川ナッシュと伊住禮次郎（茶美会主宰）による赤ちゃん人形のコレオグラフや、アジア系アメリカ人のコレクティブ FAC XTRA RETREAT によるパフォーマンスによって、躍動感のある、多声的な空間が生まれます。そして、隣接する韓国館（代表作家：チェ・ゴウン、ノ・ヘリ、キュレーター：チェ・ビンナ）との史上初の公式連携として、互いの作品が行き来する仕掛けやイベントの共同開催を予定しています。

このヴェネチアでの実践は、荒川ナッシュ医がプロデュースし、作家・映像作家の中村佑子と社会学者の佐伯栄子とコラボレーションして制作する映像作品として 2027 年に東京で公開予定です。

■ 観客の作品参加

本展では、オーディエンス・アクティベーションとして、希望する来館者が赤ちゃん人形を抱きながら展示空間を巡る身体感覚を伴う体験に参加できます。

実施期間：会期中は毎日（ヴェネチア・ビエンナーレの開館日に準じる）

■ 関連プログラム

ヴェネチア・ビエンナーレの会期中、多彩なコラボレーターとともにジャンルを横断するパフォーマンスやワークショップを展開します。

2026年5月8日、5月10日 パフォーマンス：FAC XTRA RETREAT

荒川ナッシュ医、パティ・チャン、パール・C・シーウン、アマンダ・ロス＝ホ、アナ・スー・ホイ、シャーリー・セ、エイミー・ヤオのメンバーによって構成されるアーティスト・コレクティブ によるパフォーマンス。

2026年8月28日 ワークショップ：荒川ナッシュ医 + End of Summer

複数名の若手アーティスト、キュレーターをヴェニスに招聘。カ・フォスカリ大学の研究者や学生とクリエイティブトランスレーションやパフォーマンスについてワークショップを行う。

2026年11月22日 パフォーマンス：荒川ナッシュ医 + End of Fall

ACCJ（AIT）による今回の日本館のカーボンフットプリントのリサーチからインスピレーションされた荒川ナッシュによるクロージングパフォーマンス

※パフォーマンスの開始時間および、追加で実施されるエデュケーショナル・ツアーなどの最新情報については、日本館公式ウェブサイト（<https://venezia-biennale-japan.jp/j/>）または公式 Instagram（@japan_pavilion_vb2026）をご確認ください。

この件に関するお問い合わせ：

国際交流基金 ブランド推進部 広報課（担当：福島、熊倉）

Tel: 03-5369-6075 / Fax: 03-5369-6044 E-mail: press@jpf.go.jp

取材のお願い

■ **コラボレーター** ※各人の略歴については、本紙 8～11 ページをご参照ください。

荒川美和子と友人たち in 福島（ベビー服縫製）

アート・クライメイト・コレクティブ・ジャパン（NPO 法人アーツイニシアティブトウキョウ）

崔在銀／チェ・ジェウン（アーティスト）

カ・フォスカリ大学 アジア・北アフリカ研究学科（DSAAM）

End of Summer

FAC XTRA RETREAT（荒川ナッシュ医、パティ・チャン、パール・C・シーウン、アマンダ・ロス＝ホ、アナ・スー・ホイ、シャーリー・セ、エイミー・ヤオ）

石井ゆかり（ライター）

伊住禮次郎（茶道家、茶釜歴史研究者）

R・キクオ・ジョンソン（イラストレーター）

韓国館 2026（代表作家：チェ・ゴウン、ノ・ヘリ、キュレーター：チェ・ビンナ）

ペマーキ（建築設計事務所）

森大志郎（グラフィックデザイナー）と小池俊起（グラフィックデザイナー）

中村佑子（作家、映像作家）と佐伯英子（社会学者）

ノグチ美術館（日本館 2026 子どもワークショップのためのコラボレーション）

NUNO（テキスタイルデザインスタジオ）

サージ・チェレプニン（作曲家）

この件に関するお問い合わせ：

国際交流基金 ブランド推進部 広報課（担当：福島、熊倉）

Tel: 03-5369-6075 / Fax: 03-5369-6044 E-mail: press@jpf.go.jp

取材のお願い

■日本館美術展として初の試み：クラウドファンディング実施

本展では、さらなる表現の追求と、より開かれた参加の形を目指し、「**現地と世界をつなぐ映像制作**」を目的とした作家主導のクラウドファンディングを2025年11月13日より実施しています。

より多くの方々にプロジェクトのプロセスを共有できるよう、2026年3月31日までだった**受付期間を4月12日まで延長**することを決定いたしました。

クラウドファンディングで募る支援は、ヴェネチア現地での展示の様子やパフォーマンスを記録する**新作映像作品の制作**に充てられます。この映像は、**荒川ナッシュ**がプロデュースし、作家・映像作家の**中村佑子**と社会学者の**佐伯英子**とコラボレーションして制作されます。**物理的に会場を訪れることが難しい方々とも日本館の体験を分かち合い、プロジェクトの記憶を未来へ繋ぐための重要な記録**となります。公的な支援の枠組みを超え、作家と支援者ひとりひとりの想いが結実する「映像」というかたちでの還元を目指します。

多彩な返礼品として、本展ロゴの入った「草の赤ちゃん、月の赤ちゃん」Tシャツ、本展に用いられる赤ちゃん人形をご自宅に迎え入れていただける**「草の赤ちゃん、月の赤ちゃん」人形の里親募集・コース**や、荒川ナッシュの双子の手形がスタンプされた**「イサム・ノグチの《AKARI》が届くイサム・ノグチ美術館・コース**などをご用意しています。

ウェブサイト：<https://congrant.com/project/artnest/19915>

■ファンドレイジングの進捗状況

本展は、2025年夏に開始した国際交流基金（JF）とアーティストやキュレーター等による日本館チームによる寄付・協賛募集において、翌年1月には目標額の1億円を達成いたしました。

今回の資金調達は、国内外を拠点に活動する個人コレクターや有志、および企業の支援によって構成されており、作家の活動への支持とともに、日本館創設70周年を応援する広範なネットワークがその基盤となっています。

ヴェネチア・ビエンナーレは、参加各国の文化の成熟度が示される極めて重要な国際舞台です。今回の支援は、国際的な発信力を持つ大規模な展示を実現するための、極めて重要な基盤となります。

この件に関するお問い合わせ：

国際交流基金 ブランド推進部 広報課（担当：福島、熊倉）

Tel: 03-5369-6075 / Fax: 03-5369-6044 E-mail: press@jpf.go.jp

取材のお願い

■ 第61回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展 日本館 <https://venezia-biennale-japan.jp/j/>

展覧会タイトル：「草の赤ちゃん、月の赤ちゃん」

会期：2026年5月9日（土） - 11月22日（日）

*内覧会：2026年5月6日（水）～8日（金）：プレス・関係者のみ

会場：日本館（ビエンナーレ会場 ジャルディーニ地区内）

作家：荒川ナツシュ医

共同キュレーター：高橋瑞木（CHAT 紡織文化芸術館館長兼チーフ・キュレーター）、堀川理沙（シンガポール国立美術館シニア・キュレーター兼キュレトリアル&コレクション部門部長）

主催/コミッショナー：国際交流基金（JF）

特別助成：公益財団法人 石橋財団

*取材に際しては、ヴェネチア・ビエンナーレ財団への事前のプレス登録が必要です。

下記リンクより詳細をご確認のうえ、お手続きをお願いいたします。

プレス登録：<https://www.labiennale.org/en/art/2026/accreditation>

■ コミッショナーについて

国際交流基金（JF）は「日本の友人をふやし、世界との絆をはぐくむ。」をミッションに、「文化芸術交流」「日本語教育」「日本研究・国際対話」を推進する独立行政法人です。JFは1976年よりヴェネチア・ビエンナーレ日本館展示の主催者/コミッショナーを務めています。

■ 第61回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展 日本館 代表作家 選考過程

本展の代表作家は、国際交流基金（JF）が委嘱した国際展事業委員会により、国内外 26名の推薦委員が作成した候補者リストをもとに、2回にわたる厳正な選考会議を経て選出されました。選考では、パフォーマンスや映像を主要な要素としつつ、現在の国際的な美術の潮流に応答し、日本館の建築的特徴を活かした具体的な展示プランが総合的に評価され、荒川ナツシュ医が代表作家に決定いたしました。

■ 荒川ナツシュ医（日本館 出品作家）

1977年福島県生まれ。日系アメリカ人。アメリカ合衆国ロサンゼルス在住のクィア・パフォーマンス作家。様々な人物との共同作業を続け、「私」という主体を揺るがしながら、アート作品や作家の主観の不確かさをグループ・パフォーマンスとして表現している。ロサンゼルスのアートセンター・カレッジ・オブ・デザイン、大学院アートプログラム教授。近年では、ハウス・デア・クンスト（ミュンヘン、2025年）、国立新美術館（2024年）、CHATセンター・フォー・ヘリテージ・アーツ・アンド・テキスタイル（香港、2024年）、東京都写真美術館（2024年）、クンストハレ・フリアール・フリブル（2023年）、ミュージオン・ボーツェン（ボルツァーノ、2023年）、アーティスツ・スペース（ニューヨーク、2021年）、テート・モダン（ロンドン、2021年）、ジャン大公近代美術館（ルクセンブルク、2021年）、ホノルル・ビエンナーレ（2019年）などの展覧会に参加。

* 「荒川ナツシュ」までが複合の名字ですので、「荒川」ではなく「荒川ナツシュ」と表記をお願いします。

* 日本語で荒川ナツシュの代名詞を使用する場合は、「彼」や「父親」という表現は避け、性別を限定しない別の表現（例：「作家」「親」など）をご使用ください。また、英語の場合は、「he」ではなく「they」をご使用ください。

この件に関するお問い合わせ：

国際交流基金 ブランド推進部 広報課（担当：福島、熊倉）

Tel: 03-5369-6075 / Fax: 03-5369-6044 E-mail: press@jpf.go.jp

取材のお願い

■高橋瑞木（日本館 共同キュレーター）

香港の CHAT 紡織文化芸術館の館長兼チーフ・キュレーターとしてミュージアムの基本方針の立案、組織とプログラムの企画設計を 2020 年から主導。2017 年から 2020 年にかけては、同館の共同ディレクターとして、ミュージアムの設立理念やアーティストディレクションの策定、展示やラーニング、パブリックプログラムの企画と実施、制度設計と運営の両面に関わる。日本では森美術館開館準備室（1999-2003 年）水戸芸術館現代美術センター（2003-2016 年）に勤務。これまでの主な国内外の企画として、水戸芸術館現代美術センターでは、「Beuys in Japan : ボイスがいた 8 日間」（2009）、「高嶺格のクールジャパン」（2012）など、CHAT では、「Unfolding : Fabric of Our Life」（2019）、「Sudō Reiko: Making NUNO Textiles」（2019）、「Yee I-Lann: Until We Hug Again」（2021）、「Jakkai Siributr: Everybody Wanna Be Happy」（2023）などがある

■堀川理沙（日本館 共同キュレーター）

シンガポール国立美術館（National Gallery Singapore）設立に準備段階から関わり、現在は同館シニア・キュレーター兼キュレトリアル&コレクション部門部長。コレクション及びアーカイヴ形成やアクセシビリティに関するストラテジーを担う。近年は東南アジア・東アジアを中心に交錯するモダニズムを、特に 1930 年代から 40 年代に重きをおいて調査。当館での展覧会に「Between Declarations and Dreams: Art of Southeast Asia since the 19th century」（2015 年）、「Reframing Modernism: Painting from Southeast Asia, Europe and Beyond」（2016 年）、「(Re)Collect: The Making of Our Collection」（2018 年）、「City of Others: Asian Artists in Paris 1920s-1940s」（2025 年）など。現職以前は福岡アジア美術館学芸員（2003-2012 年）、中国ロング・マーチ・プロジェクトのキュレトリアル・チームに参加（2002-2003 年）。

■ コラボレーターのプロフィール

荒川美和子（ベビー服縫製）

作家の母である荒川美和子は、作家が 12 歳の時から、「ソロ・ペアレントリング」をしている。今回は彼女と彼女の福島友人たちで展示のために 200 着のベビー服を手作りした。

アート・クライメイト・コレクティヴ・ジャパン（NPO 法人アーツイニシアティヴトウキョウ）

アート・クライメイト・コレクティヴ・ジャパン（ACCJ）は、現代アートを通じた学びと対話の場を創出する NPO 法人 AIT が運営する、気候危機への意識向上と実践的な取り組みの推進を目的とする活動。日本における気候危機とその芸術分野への影響について、広くアクセス可能な情報を提供し、アートセクターにおける環境に配慮した行動の促進を目指している。

崔在銀/チェ・ジェウン（アーティスト）

韓国・ソウル生まれのアーティスト。1976 年に日本へ移住。生け花に魅せられ、草月流の三代目家元・勅使河原宏（てしがはら・ひろし）に師事し、多くのインスタレーションや彼の映画制作に携わった。1995 年には、第 46 回ヴェネチア・ビエンナーレの日本代表のひとりとして参加。2015 年以降は、朝鮮半島の非武装地帯（DMZ）で展開されている「自然国家：Dreaming of Earth Project」の延長として、破壊された森林を再生するプロジェクトに取り組んでいる。

この件に関するお問い合わせ：

国際交流基金 ブランド推進部 広報課（担当：福島、熊倉）

Tel: 03-5369-6075 / Fax: 03-5369-6044 E-mail: press@jpf.go.jp

取材のお願い

カ・フォスカリ大学 アジア・北アフリカ研究学科 (DSAAM)

1868年に「王立商業高等学校」として創立されたヴェネツィアの公立大学で、言語学、経済学、国際関係学で高い評価を得ている総合大学である。学科内の日本研究プログラムは、ヨーロッパでも有数の規模で1,000人以上の学生が在籍し、言語・文学研究から社会科学、視覚・舞台芸術に至る学際的な教育を行う。日本語教育に加え、現代社会や伝統文化の理解を深めることで、批判的思考と国際的視野を養うことを重視している。

End of Summer

2016年にオレゴン州ポートランドで始まった、日米を横断するアーティスト・イン・レジデンスおよびレクチャーシリーズ。ポートランドを拠点に、日本の新進アーティストを対象とした年次のレジデンスと公開トークを展開し、芸術表現を通じて太平洋地域と日本の文化的対話を育んできたプログラムである。2026年夏にはヴェネチア・ビエンナーレ日本館と共に翻訳と異文化関係をテーマとするワークショップを企画予定で、2027年にはArt J Foundationの一部として再開される予定である。

FAC XTRA RETREAT

荒川ナッシュ医、パティ・チャン、パール・C・シーウン、アマンダ・ロス=ホ、アナ・スー・ホイ、シャーリー・セ、エイミー・ヤオのメンバーによって構成されるアーティスト・コレクティブ。メンバーはいずれも、様々な美術大学や大学で教鞭をとるアーティストである。2022年、カリフォルニアを拠点とするアーティストおよびアートワーカーのネットワークであるAsian American Pacific Islander Arts Network (AAPIAN)を通じてつながった。

パティ・チャンは、パフォーマンス、映像、テキスト、写真、彫刻など多様なメディアを横断して活動する現代美術家である。彼女の実践は、自己とより大きな生態系との関係性を探究している。近年のプロジェクトである「Learning Endings」「Abyssal」「Stray Dog Hydrophobia」（デイヴィッド・ケリーとの共作）では、科学的労働、中国系移民と磁器の歴史、そして採掘、植民地主義、奴隷制、ジオエンジニアリングをめぐる海洋的な絡み合いを考察している。

パール・C・シーウン（台湾・台中生まれ）は、ロサンゼルスを拠点に活動するアーティストである。絵画、映像、インスタレーションを制作し、変化や変容が起こる場所やテーマを探究している。作品は南北アメリカ、ヨーロッパ、アジアにおいて個展およびグループ展で発表されている。現在、カリフォルニア州立大学ロングビーチ校の助教授を務める。

アマンダ・ロス=ホは、学際的に活動するアーティストであり、カリフォルニア大学アーバイン校・彫刻科の教授。彫刻、インスタレーション、パフォーマンス、パブリックアートを国内外で広く発表している。彼女の作品は、時間の副産物を実験的なアーカイブ、モニュメント、言説的なタブローへと再編成する。ロサンゼルス在住。

アナ・スー・ホイ（ニュージーランド・オークランド生まれ）はロサンゼルスを拠点とするアーティスト。彫刻、パブリックアート、パフォーマンスを横断しながら環境との関係性を探り、儂いものや手仕事の力を示す作品を制作している。彼女の実践は、現代美術における陶芸素材への再関与の最前線に位置づけられ、また美術とクラフトの関係を批判的に再考する動きとして評価されている。カリフォルニア大学ロサンゼルス校教授。

シャーリー・セ（香港生まれ）はカリフォルニアを拠点に活動するアーティスト。彫刻、写真、映像を融合させた革新的でリサーチ主導型のインスタレーションで知られ、物質性と社会的関係性を考察している。日常的な素材や発見物、完全に制作された形態を組み合わせ、物質的な社会世界がいかに継続的に交渉されているかを探る。実験と適応に根ざした実践は、持続可能性や現代社会の相互接続性に関する重要な問いを提示している。

この件に関するお問い合わせ：

国際交流基金 ブランド推進部 広報課（担当：福島、熊倉）

Tel: 03-5369-6075 / Fax: 03-5369-6044 E-mail: press@jpf.go.jp

取材のお願い

エイミー・ヤオはロサンゼルスとニューヨークを拠点に活動するビジュアルアーティスト。廃棄物、消費、アイデンティティに関する考察を基に、様々なメディアで制作を行う。近年の作品では、芸術実践における批評性と生成的な制作との関係を再検討している。ライオット・ガール期である 1990 年代初頭には、妹の Wendy Yao (ウエンディ・ヤオ) と親友 Emily Ryan (エミリー・ライアン) とともに、アジア・アメリカンのフェム・バンド「Emilys Sassy Lime」を結成。現在、カリフォルニア芸術大学 (CalArts) の専任教員、バード大学 MFA プログラム彫刻専攻のアソシエイト・チェアを務める。

石井ゆかり (ライター)

日本で最も影響力のあるライター兼占星術家の一人で、自らをライターと位置づけ、星の動きから予言ではなく、人生や生活を語るための言葉を見出す。雑誌やデジタルプラットフォームでの執筆活動を通じ、共感に満ちながらも論理的な文章で現代への洞察を提供し、読者を励ます姿勢が高く評価されている。

伊住禮次郎 (茶道家、茶釜歴史研究家)

京都生まれ京都市育ちの伊住禮次郎は、著名な茶道家であり、茶釜の歴史研究家である。裏千家第 15 代家元の孫で、茶道家名として「宗禮 (そうれい)」を名乗る。Dupty director of Chado Research Center、Vice principal of Urasenke Gakuen Professional College of Chado を務める。父・泉宗光が創設した茶美会 (さびえ) プロジェクトを通じ、現代アーティストや思想家、様々な文化専門家と協働しながら、茶道の哲学的概念を推進している。

R・キクオ・ジョンソン (イラストレーター)

1981 年マウイ島生まれの漫画家・イラストレーター。作品は書籍や定期刊行物、アニメーション、さらに『The New Yorker』の表紙にも掲載されている。ニューヨーク市ブルックリン在住で、妻と娘と暮らしながら、スクール・オブ・ビジュアル・アーツで教えている。

韓国館 2026

チェ・ビンナは、韓国出身のキュレーター。国際的に活動し、20年以上にわたりキュレーションや研究に携わる。オランダ・ユトレヒトの Casco Art Institute: Working for the Commons のディレクターとして、新たな制度的モデルの形成を牽引してきた。近年のキュレーション・プロジェクトには、2025年ハワイ・トリエンナーレおよび2022年シンガポール・ビエンナーレがある。また、ドウサン・キュレーター・ワークショップ (2024 年-現在)、光州ビエンナーレ国際キュレーターコース (2025 年)、ダッチ・アート・インスティテュート (2008-2022) などでも活動している。

チェ・ゴウンは、生活インフラで使われる硬質金属を中心に、敷地全体をひとつの有機的な空間として捉え、内外の境界を横断するサイト特有の彫刻作品を制作するアーティスト。近年の活躍では、第 2 回 フリーズ・ソウル アーティスト・アワード (2024) 受賞、第 7 回昌原彫刻ビエンナーレ (2024) への参加、アマド・アート・スペースでの個展「コーナリング」(2022)、P21 での「ビビッド・カット」(2021) などがある。

ノ・ヘリはブルックリンとソウルを拠点に活動するアーティスト。手作りの彫刻的オブジェや構造物を用い、多言語で展開される断片的な物語に基づくパフォーマンスを制作する。移動の多い人生経験を背景に、家族の歴史や場所、言語、身体、動き、物語を作品に織り込む。近年のプロジェクトには、ドウサン・ギャラリーでの個展「August is the Cruellest」(2025)、Canal Projects での個展「Niro」(2024)、Project Space SARUBIA での個展「Jinhee」(2022) がある。ニューヨーク大学ティッシュ・スクール・オブ・アーツの助教も務める。

この件に関するお問い合わせ :

国際交流基金 ブランド推進部 広報課 (担当 : 福島、熊倉)

Tel: 03-5369-6075 / Fax: 03-5369-6044 E-mail: press@jpf.go.jp

取材のお願い

ペマーキ

ペマーキは福田純平（安藤忠雄建築研究所を経て現職）と槇原拓也（設計機構ワークスを経て現職）により2024年に設立された建築設計事務所。組み立ての中に発見される驚きや喜びを基点に、広くモノづくりに関わる活動をしている。

森大志郎（グラフィックデザイナー）と小池俊起（グラフィックデザイナー）

森大志郎は、現代美術の展覧会や作家のモノグラフのデザインで特に知られる。現代作家の作品のコンセプト、素材、色彩、技法を鋭く解釈したデザインにより、数多くの作家から厚い信頼を得ている。

小池俊起は、書籍や印刷物を中心としたエディトリアルデザインを専門とし、作家のモノグラフのデザインでは、印刷技法や製本の実験的な手法が高く評価されている。

中村佑子（作家、映像作家）と佐伯英子（社会学者）

中村佑子は作家、映像作家。映画作品に『はじまりの記憶 杉本博司』、『あえかなる部屋 内藤礼と、光たち』、テレビ演出作に「NHK 幻の東京計画 首都にありえた3つの夢」などがある。著作に『マザリング 性別を超えて〈他者〉をケアする』、『わたしが誰かわからない ヤングケアラーを探す旅』。連載『なぜこの世界で子どもを持つのか 希望の行方』、『女が狂うとき』（岩が来年刊行予定。立教大学現代心理学部映像身体学科兼任講師）。

佐伯英子は、法政大学人間環境学部教授・ウプサラ大学社会学部客員研究員（2025 -2026）。家族、ジェンダー、リプロダクティブ・ジャスティスを専門とする社会学者。日本における精子・卵子提供や代理懐胎など第三者が関わる生殖補助技術と、それによって築かれる家族の経験を研究する。ドナーコンセプションによる家族のための「ふぁみいるネットワーク」共同代表として、研究と社会をつなぐ活動にも取り組む。

ノグチ美術館（日本館 2026 子どもワークショップのためのコラボレーション）

イサム・ノグチ（1904-1988）は日系アメリカ人アーティスト。20世紀を代表する造形作家の一人であり、六十年にわたる活動で、ステンレス鋼、大理石、鋳鉄、バルサ材、青銅、アルミニウム、玄武岩、花崗岩、水など、多様な素材を用いた作品を制作した。また、庭園、遊具、広場、家具、照明、舞台美術なども手がけ、広い意味での「彫刻」の概念を拡張した。特定の芸術運動に属さず、様々な分野の専門家と協働しながら、伝統的かつ現代的、有機的かつ工業的、遊び心と深みを併せ持つ作品を生み出した。1986年にはヴェネチア・ビエンナーレでアメリカを代表した。

NUNO（テキスタイルデザインスタジオ）

1984年に東京で設立。現在は須藤玲子が率いているテキスタイルデザインスタジオ。様々な職人と協働し、伝統的な染色・織りの技術と最新テクノロジーを融合した作品を制作する。金属や紙、再生繊維などの異素材を用いた革新的な布地で知られ、MoMA（ニューヨーク近代美術館）やV&A（ヴィクトリア&アルバート博物館）など、主要美術館の常設コレクションに収蔵されている。

サージ・チェレブニン（作曲家）

音楽・視覚芸術・パフォーマンスを横断する制作を行うアーティスト兼作曲家。既存の建築空間に独自に設計したスピーカー配置を用い、しばしばスピーカーを彫刻に組み込むことで、彼のインターメディア的インスタレーションは視点の間で揺れる不安定なダンスを提示する。目に見えるもの、聞こえるもの、感じるもの、想像されるものが混ざり合い、官能的かつ知覚的な相互作用を生み出すこの形式を、彼は「ソニック・シアター」と呼ぶ。

この件に関するお問い合わせ：

国際交流基金 ブランド推進部 広報課（担当：福島、熊倉）

Tel: 03-5369-6075 / Fax: 03-5369-6044 E-mail: press@jpf.go.jp

取材のお願い

■ 基本情報

【第61回 ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展 全体概要】

会期：2026年5月9日（土）～11月22日（日）

会場：ジヤルディーニ地区（Giardini di Castello）、アルセナーレ地区（Arsenale）など

制作：ヴェネチア・ビエンナーレ財団

総合テーマ：In Minor Keys/イン・マイナー・キーズ

ウェブサイト：<https://www.labiennale.org/en>

■ ヴェネチア・ビエンナーレ（La Biennale di Venezia）について

ヴェネチア・ビエンナーレは、イタリアの島都市ヴェネチアの市内各所を会場とする芸術の祭典です。1895年に最初の美術展が開かれて以来、130年近い歴史を刻んでいます。近年、世界各地で美術を中心に、国際的な芸術祭が開催されるようになってきていますが、ヴェネチア・ビエンナーレはそれらのモデル・ケースとなった最も著名な存在です。「ビエンナーレ」とは「2年に一度」意味するイタリア語で、同様な芸術祭の多くが「ビエンナーレ」や「トリエンナーレ」（3年に一度）と命名されているのは、ヴェネチア・ビエンナーレに範をとったものとされています。現在、美術展、建築展、音楽祭、映画祭、演劇祭などを独立部門として抱えるようになりましたが、なかでも美術展は、現代の美術の動向を俯瞰できる場として、また国別参加方式を採る数少ない国際展として世界の美術界の注目を集めています。

日本は1952年に初めて公式参加を果たし、1956年に日本館の完成を経て、今日に至るまで毎回参加を継続しています。1976年からはJFが日本館展示を主催し、現在に至ります。日本館の過去の代表作家については日本館公式ウェブサイトをご覧ください。

<https://venezia-biennale-japan.jpif.go.jp>

【第61回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展日本館に関するお問い合わせ】

国際美術展日本館

国内メディア広報担当：有田、津田 arita@earlypress.info

海外メディア広報担当：Sutton Communications japanVB2026@suttoncomms.com

プレスキット：https://drive.google.com/drive/folders/1zEV26R7nMJ_sWDHSV-dqtCtAMEE9YwMj?usp=sharing

この件に関するお問い合わせ：

国際交流基金 ブランド推進部 広報課（担当：福島、熊倉）

Tel: 03-5369-6075 / Fax: 03-5369-6044 E-mail: press@jpf.go.jp